

|                  |  |
|------------------|--|
| Title            | 続:J.-J.ルソーの無名時代の著作研究 : リヨン時代を中心として   |
| Sub Title        | The study on writings of J.-J. Rousseau in his nameless period : continuation  |
| Author           | 井上, 坦(Inoue, Akira)  |
| Publisher        | 三田哲學會  |
| Publication year | 1971   |
| Jtitle           | 哲學 No.58 (1971. 12) ,p.317- 335  |
| JaLC DOI         |  |
| Abstract         | <p>As the continuation of the former paper on Rousseau, (Philosophy, ed. by Mita Philosophical Society, No. 56, 1970) I try to study here two letters in verse and a letter by J.-J. Rousseau written between 1740 ~ 1742, namely in his days in Lyon. In his Letter in Verse to Ch. Bordes, his friend then, his adversary later, Rousseau discusses the theme of poverty and wealth, and has no sympathy with the stoic notion that there are advantages in poverty and that the poor ought to be happy. Young Rousseau suggests that there is no wisdom where poverty rules. "Tant de pompeux discours sur l'heureuse indigence m'ont bien l'air d'etre nes du sein de l'abandance." In his Letter to F. J. Conzie, his friend in Chambery, Rousseau criticizes "An Essay on Man" by A. Pope, the representative English poet in the 18th Century. Rousseau attacks Pope's key concept that there is the chain of beings between Creator and creatures. Rousseau shows, however, his approval to Pope's words on human happiness that no man can not make happy life without virtue, but at the same time, no man can not make happy life with virtue alone. Rousseau regards virtue, health and the necessities of life as three components of human happiness, but in this period he has no exact and deep sense of the necessities of life. In his Letter in Verse to G. Parisot, a surgeon, young Rousseau confesses the continued anxiety caused by the world with which he would have to come to terms. He can not forget the ideal of an state which is made up of equal citizens, all shareing in the exercise of sovereign power. But before his eyes the very different pleasures of taste and all attractions of an opulent life in the big industrial city are paraded. He begins to reject the stoicism and semi-jansenistic rigidities of his moral view and his Genevan upbringing. " Longtemps de cette erreur la brillante chimere, seduisit mon esprit, roidit mon caractere " But in spite of the doubts and giddiness besetting him, he continues to form his own thought concerning real happiness, good society and good education.</p> |
| Notes            | 名誉教授宮崎友愛先生記念論文集  |
| Genre            | Journal Article  |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000058-0325">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000058-0325</a>  |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 続：J.-J. ルソーの無名時代の著作研究

——リヨン時代を中心として——

井 上 坦

## 目 次

- I 序
- II 『ボルド宛ての書簡詩 (Epître)』
- III 『コンジェ宛ての書簡』
- IV 『パリソ宛ての書簡詩』
- V 総 括
- VI 文 献

### I 序

私は私の『J.-J. ルソーの無名時代の著作研究』（哲学〔三田哲学会〕第56集，1970年10月）の終章を『暫定的結語』として，その中でルソーのリヨン時代（1740～1742）の二つの書簡と一つの手紙（風の論文）を続いて研究し，さらに無名期の作品全体を通じてえられる若いルソーの思想構造と思惟方向に関して総括することを，残された課題として示しておいた。この続編はそれらの課題をできる限りはたすためのものである。

### II 『ボルド宛ての書簡詩 (Epître)』

II. 1. この書簡詩の成立事情など———ボルド (Charles Bordes 1711—1781) については『告白録』その他である程度明らかであるからここで

は深くは紹介しない。ルソーはボルドへ二つの書簡詩を捧げているが、ここで研究する書簡詩は第1番目のより長いもので、アレキサンドル句格で書かれている。(第二のものは実はヴェネチアで書かれたといわれる。)ルソー年代記の研究者クールトワ (Courtois) によると 1741年後半に書かれたとされるが、ギョー (Ch. Guyot) も指摘するように恐らくマブリー家での家庭教師時代にスケッチされていたものであろう。(O. C. II. p. 1893). この書簡詩は 1743年3月『Journal de Verdum』に掲載されたが、この Journal の発行者 Monthenaut d'Egly はルソーを次のように紹介している。「ジュネーヴの人、ルソー氏はその近代音楽に関する論文ですでに知られている――私は公衆にルソー氏が友に送った書簡詩を知らせたい。私はこの書簡詩を切願してやっと彼の羞恥心から引離した。人は特にリヨンのマニュファクチュールについてなした叙述において、ルソー氏が自分を散文と同じく詩でも気高く表現しうることを――を確認するであろう。」(C.G.I. p. 144)

この発行者の見地とは別の意味において、私たちも特にマニュファクチュールについてどんな叙述をルソーがしているかに強い関心を持つのである。

II. 2. ボルド宛て書簡詩の構造と内容――原文は124行からなる全体を一応10箇のブロックないしは節に分けてある。しかしこの節分けは必ずしも内容の構造に即しているとは言えない。私はいくつかのブロックはひとまとめにして大きく6箇の節に分けることが内容の明確化に一層役立つと考える。そしてこの中で特に注目に価するものは第iv節と第v節である。

第 i 節：挨拶。 (1～8行)「パルナスのためにアポロ自身が導く君よ、君は一人の臆病なミューズを敢えて刺激する」で始まる最初の節はこの書簡詩がボルドのすすめで作られたものらしいことを暗示している。

第 ii 節：自分のペンの誇り。 (9～42行) ルソーはまず自分の無器用さが詩人の名誉をうるのに適さないと謙遜したあとで、心秘そかな誇りを込

めていう。「私は私の田舎のハーブの調べで／詩においてスイスのミュージックを不調和に奏でようとする。」ルソーにいわせれば「すべての詩人は嘘つきで職業が嘘を許す／詩人は華美な言葉で金持の自惚れ男や／新らしい学芸の保護者や国家の柱石をつくることができる。」しかし「倨傲な共和主義者 (fier républicain) たるこの私は」とルソーは昂然と述べる「もし富者の前で平伏して請い求めなければならぬのなら／富者からは無作法に支援を無視する。」と。この気持は若いルソーにおいてけっして偽りではなかったろう。そして彼は繰返し「苦味を減ずることなく真実を語る」こと、「詩の中で真実に背くことを知らない」こと、「けっして悪い金満家の愚かさに香を捧げないだろう」ことを強調する。「真実のために命を捧げる」(vitam impendere vero) をモットーにした後年のルソーの姿が既にここにほの見える。ただしこの主観的真実性が客観的真実性に同時になっているかどうかについては、必ずしも疑いがなくはないであろう。

第 iii 節：これまでのルソーの信念，貧困の中の徳の讃美。(43～56行)

「おお貧しい卑賤さの中にいるあなた達よ／貧しさで徳を培え。」ルソーはここでこれまでのルソーが信じて来たストア派的な徳の理想を回顧する。この理想はまた8年後の『学問芸術論』で絢爛と述べられる素朴な古代への思いでもある。「古代のあまりに貴重な残りよ／古代では最少の支度で祖先達は満足し／彼らの道徳 (moeurs) では深く彼らの粧いでは質素に／自然の必要以外には感じなかった。」だがこれらのいわば反近代的な調子はたちまち消えてしまう。

第 iv 節：動揺と新しい視野。(57～72行) 「しかし、なぜ私を虚しい空想が支配するのか？貧窮 (misère) の支配するところに知恵はない；飢餓の足元で倒れ伏した才能 (mérite) は／悲しみの心の中で徳を消し去る。」ここに単なる古代崇拜以上の新しい視野の萌芽が始めて現れる。それは『人間不平等起原論』『政治経済論』の基調をなし、『エミール』『告白録』の中でもしばしば鮮明に示されるところの人間の社会的現実へのラジカルな

批判と怒りへの萌芽である。この目から見れば「幸いなる赤貧」(l'heureuse indigence) という輝かしいコトバもごまかしであり、自分では「もつ必要のない徳」を他人に説く偽善にすぎない。しかし、「ボルドよ、私のミュージーズのために〔貧しさの讚美以外の〕別の主題を探そう」とのべたルソーが主題として取上げたものは「革命」でも「農村共同体」でもなくて、実に「産業」(industrie) でありリヨンの「都市生活」であった。

第 v 節：近代産業と近代都市の讚美。(73～112行) 「いやむしろ罪のない産業 (l'innocente industrie) を賞めたゝえよう／それは生の甘美さを何倍にもできる」で始まる以下の 40 行は、『学問芸術論』以後のルソーの著作に馴染んでいる人を驚かせ、困惑させる。「その商業 (Commerce) はどこでもいつでも敬われ／社会の強いきずなをなす」「フランスの飾りたる幸いなる都市よ／世界の宝庫、豊かさの源泉／リヨンよ、富の神プルートの子らの魅力ある宿よ。」これらの句は皮肉で述べられているのではないから、プレイアード版の第 II 巻編者 B. ガニユバンらが指摘するように『アポロとプルートスが一緒に居るのに驚く』というルソーのこれらを一緒にしてほめる句にこそ驚く」という事になる。さらにルソーはリヨンの司法・財務長官であるパリュ (Pallu) に呼びかけて「人はあなたの配慮に感激する：あなたは私たちに／評判高き世紀、ティル〔古代商業都市〕とアテネの世紀を持ち来らす」とまで歌っているのである。これらの詩句を書いたルソーの精神構造、理由をいかに考えるべきか。

まず第 1 に考えられる解釈は、ルソーが大都市リヨンの社交界に受け入れられ地位を占めるために必死の努力、自己をも裏切る程の努力をしているという解釈である。1740年 5 月 1 日付『ヴァラン夫人への手紙』を見てもこれがリヨン到着時のルソーの第一の願望だったことは判る。(C. G. I. p. 131). しかしこのようにへつらいによる曲筆とのみ見ることは「追しょうと中復の敵である私のペンは詩の中で真実に背く事を知らない」と歌ったばかりの若いルソーに対して、余りにも意地悪な、不当な解釈ではなかる

うか。

第1の解釈は後年の一応成熟したルソーの思想から見るのがあまりに強く作用している。だが実際にこの時代のルソーの思想はもっと未成熟で未完成であり、彼の感覚も刺激に敏感であり動かされやすかった筈である。ここにもっと積極的に理解と意義を与える第2の立場の可能性がある。たしかにジュネーブの雰囲気とシャルメット時代の勉学により若いルソーの中にストア的、古代讚美的、共和主義的なものがある程度を張ったことはすでに指摘した通りである。しかしそれらの思想はいわば即自的なもの、素朴な直接的なものであるにすぎなかった。したがってその即自的思想がこれまでよく知らなかった絢爛たる都市文明に触れた時、その光彩にうたれ、新しい生の可能性に眩惑されたとしても不思議ではないだろう。しかもルソーはこの眩惑の中から、ある部分を後年の思想の中へ重要な要因として取り上げているように私には思える。そのある部分とは反禁欲的、反ジャンセニズム的なもの、生の甘美さの肯定という重要な要因であるが、これについては『パリソへの書簡詩』の研究でさらに論究する。〔第IV. 2. v. vi. など〕

以上の第2の解釈の立場をさらに進めて、これらのいわば反ルソー的な詩の行間に、やはり変らぬルソーの姿をかい間見することも全然不可能ではない。次の詩句を見よう。「そして彼ら〔トリノ、ロンドン〕の冷やかな仕事の中で彼らは自然を強いる―――に対して／常に輝かしく純粋なあなたの誠実さは／それが装うものにより微妙な目を与え／美にさえもさらに光輝を提供する。」(93～96行) 自然を強いる (forcer la nature) ことはやはりここでもすでに排斥されている。そしてリヨンの産業が賞めたたえられるのもそれが「罪のない」ゆえであり、自然を強いず、誠実さによって担われているからである。

第vi節：結び、ボルドへの儀礼的詩句 (113～124行) ここではボルドの才を賞揚し自己の非才を嘆くが、特に注意すべき程のものはない。

### III 『コンジェ宛ての書簡』

III. 1. この書簡の成立事情など——J. コンジェ (François-Joseph de Conzié, comte des Charmettes et baron d'Arenthon 1707-1789) については『告白録』の第V巻、第VI巻及び第XII巻に変らぬ友情をもって述べられている。この書簡は最近になり Jean Nicoles により見出され 1962年版の『フランス革命史年報』(Annales historiques de la Revolution française) に始めて印刷されたものであり、J. Nicolas によればその特徴ある筆蹟といい、署名といいルソーのものに間違いないとされる。なおこの書簡の日付けは 1742年1月17日となっておりリヨンからジャンベリーへの帰路のものと推察されている。なお長さは『年報』に印刷された頁数でいって7頁半になっている。

III. 2 この書簡の内容——A. ポウプ (Alexander Pope, 1688-1744) の代表作ともいえる『人間論』(An Essay on Man, 1733-34) への批評と共感がこの書簡の内容をなしている。コンジェは『人間論』のフランス語訳が出版され、J. P. クルーザ (Crousaz) の批判を始めとして色々な評価がこの著について行われ出したのを機会に、ルソーに対してその見解を問うたらしい。

説明の順序としてまず簡単に英国古典主義文学の重要人物で、18世紀英文学を代表する一人といわれるポウプの『人間論』について述べねばならない。『人間論』は四つの書簡詩から成立し、それらはおのおの1) 人間と宇宙との関係、2) 人間と個人としての人間の関係、3) 人間と社会との関係、4) 人間と幸福との関係、を扱っている。そして中心の問題は宗教と道徳であるといえることができる。

したがってルソーの批評もまたそれらの点をめぐって展開することとなる。

### III. 3. 批判の中心

さてルソーの批判は『人間論』の第1、第2、第3書簡詩で述べられる

「存在の連鎖」(la chaîne des Etres) の思想に集中される。ポウプは歌う。「存在の巨大な鎖。それは神に始まり／天のもの、地のもの、天使、人間／けだもら、鳥、魚、虫／眼に見えぬもの、望遠鏡のとどかぬもの／無限から汝へ、汝から無へ——／上なる力に我らが続くとすれば／下なる力は我らに続いている。さもないと、完全な創造に間隙ができて／踏段の一つが折れても、大階段の全体が崩れるのだ／自然の鎖のどの環を破壊しても、十番目でも一万番目でも／鎖は同じように壊れるのだ。」(岩波文庫版、30～31頁) ルソーはこの引用のあとでいう。「この鎖の環に関して、私たちのたくさんの隣接者の中からほんの二つ三つを私たちは推量しうるにすぎない。しかもかなりの困難さをもって。なぜならばモンテーニュとポウプが本能を高尚なものとするために多くの配慮を払ったにもかかわらず、本能から理性への間には非常な飛躍があるからである。—(中略)—私たちは動物と私たちとの間に在ってこの間を満たす存在を知らない。私たちから天使的存在までの間に、私たちの知識 (lumière) は同様に限定されている。」と。(p. 391) 本能と理性との間の断絶の存在、これがポウプの「存在の連鎖」に対するルソーの批判の第1の理由である。

続いてルソーは第2の批判理由を示している。「もし望むならば、植物から昆虫、動物、人間、天使への比例的段階 (gradation proportionnelle) を容認してもよい。そして想像力により天使の階層のうちもっとも崇高なものに迄昇ってみよう。あなたは私たちがここで急に立ち止ることを感じないだろうか、(中略) 私たちは否応なしに、鎖の終点についての無知を見出さざるをえないのではないか。」(p. 392)

ポウプによれば連鎖は神に到達する。ルソーが強く批判するのはこの神への連続性の思想である。「存在の連鎖が直ちに神に達するというのは、宗教により不敬虔と却けられ、理性により不合理と却けられた、ある感性 (un Sentiment [原文の S 大文字]) を支持することである。」(p. 392～393)。さらにルソーはこのことを繰返し強調する。「要するに存在の連鎖は

神に決して到達しない。少くとも比例的段階によっては、神と神以外のいかなる存在との間にも、また、創造者とその作品の間にも、永遠と時間の間にも、一言でいえば無限と有限の間に、理性はけっして関連 (rapport) を見出すことはできない。もしポウプの思想の中に非宗教的なもの (irreligion) があるとすれば、それはポウプが存在の連鎖が神に到達すると言う時である。」 (p. 393~394)

このようにポウプへの批判はもっぱら「存在の連鎖」、「存在者間の比例的段階」の思想に集中されるが、これらの考え方に対する批判はルソーの生涯を通じて一貫しているもののように思える。实例を示せば、これから約4年後(1756年)に書かれた書簡体論文『摂理に関してヴォルテールに宛てた書簡』の中でもルソーは述べている。「あなたは被造物と創造者の間には比例的段階はなく、また、もし存在の連鎖が神に達するならば、神が鎖を保持しているからであって、神が鎖の終局であるからではないという、まことに正当にもポウプの体系を訂正している。」 (O.C. IV 巻 p. 1067, C.G. II 巻, p. 314)

さらに後年の『エミール』(1762)における『サヴォアの助任司祭の信仰告白』においても、ルソーは神(の本質)はいかなる理性の証明の対象でもない事、被造物から創造者を演繹することの不可能性を強調している。

このように「存在の連鎖」否定の方向はルソーの全生涯で不変のものと言いうるが、さらに一步掘下げて、否定の理由を考察することもルソー理解にとり有意味であろう。ルソー自身は先程の引用でも述べてあったように、1) 非理性的、2) 非宗教的の二つの理由をあげている。1) の理由と2) の理由のどちらが主要なのか、それとも二つともいわば一致して理由となるのか。しかし二つとも一致して理由となるとすれば、非理性的ということと非宗教的ということが一致するし、かなり同義的であると想定せねばならなくなる。非理性的という理由を中心とすれば、若いルソーは冷静な鋭い知性人としてポウプを批判したことになる。非宗教的という

理由を中心とすれば若いルソーは依然として故郷ジュネーヴの宗教カルヴィニズムの影響をかなり強く受けている者として批判したことになる。しかし 1) と 2) のひとつのみで割切ることには無理がある。私としては 1) と 2) の理由は結局は共同的であるとするのが正しいと思う。そう解することにより始めてルソーの宗教が単なるカルヴィニズムでも単なる理神論でもない、独特の宗教である事が明らかとなってくるのである。〔ルソーの宗教に関する私の考察については『J.-J. Rousseau の宗教』(哲学 (〔三田哲学会編〕, 第 46 集掲載)) を参照されたい。そこで私はルソーの「宗教」のもつ実践的、道徳的特質を論じておいた。一方ルソーの「理性」の独特の実践的側面については『ルソーの「理性」が示す多様性とその統一』(日本の教育のゆくえ—小林博士記念論文集—〔講談社〕掲載)) において論じてあるので参照されたい。〕

### III. 4. 賛同点

さて、上述のような批判のあとでルソーは次のように述べている。「最初の三つの書簡詩〔ポウプの〕はより悪く解するような人々には特に危険な誤謬の種子をもっている。しかし第 4 書簡詩に関しては、そこで展開される崇高な格率により心 (coeur) が高揚されるのを感じない程い美に対して無感覚な人々はほとんど居ないだろう。」(p. 394)。では第 4 書簡詩では何が論じられているかといえ、それは人間の幸福の問題であった。ルソーによれば第 4 書簡詩の眼目は「幸福は徳なしには存在せず、またポウプが『天の気高い娘』と名づけたところの心情の甘い平和 (cette douce paix du coeur) なしには存在しない」ということにある。(p. 394)。したがってポウプによれば悪徳はけっして幸福ではない。「これらのことは第 4 書簡詩で 20 回も力強く情熱的に繰返される。このことが第 4 書簡詩の原理であるならば、すべての立派な人間 (honnête homme) はその信奉者であることを光栄にしなくてはならない。」(p. 395)

だがルソーはこの時既に単なる精神主義者ストア主義者ではなく、『ボ

『ボルド宛ての書簡詩』でも示されたように、人間の現実的条件に対しても目を開いている者であった。そのルソーにとり、徳は幸福のいわば必要条件ではあっても、十分条件ではなかった。そしてポウプもまたストイックな幸福論を説かないとして、ルソーは共感をさらに示すのである。

「ポウプが、徳のみが単独で人間を幸福にしうるとは、絶対に言わないことは事実である。そして誰があえてそう言えるだろうか。」

では徳と徳の産み出す心の平和以外に、どんな条件が人間の幸福のために必要なのか。ルソーはただ二つの条件、健康と生活必要物 (le nécessaire) が満たされればよい、と指摘する。これ以外のものは人間の真の幸福にとり不要である。「地上の人間が名誉と空想上のよいものに向け駆けより、幸福の真の源泉から遠ざかるのは悲しい光景である。」(p. 395)。このような幸福概念は後年のルソーのそれに比較すればなお不十分であるとはいえ、しかしその原型たることは明らかである。さらにまた私たちはこの『コンジュへの書簡』が『ボルド宛ての書簡詩』や『パリソ宛ての書簡詩』と比較して、もっと直接的に(即自的に)後年の著作へと連なる関係に立つことのひとつの別の証しをもっている。それはこの書簡の末尾に記されたオヴィディウスの「この土地の人に理解されないので、私は異邦人である」(Barbarus hic ego sum, quia non intelligor illis)の句である。この句はその後『学問芸術論』や最晩年の著作である『対話』の冒頭にも記されるもので、ルソーが生涯愛用したゆえにルソーを知る重要な手掛りとなるものであるが、そのオヴィディウスの句がこの書簡に始めて登場するのである。

さて上述のように、幸福の必要条件として「生活必要物」をあげてルソーは現実への認識をある程度示した。しかしこの必要物の具体的内容を掘下げていく時、どれ程そこに社会経済的重みと困難性がのしかかっているかについては、この時代のルソーはやはりまだ十分に考えてはいない。その事は同時にこの時代の著作にすでに断片的に現れる「自然」という概

念の不十分さ、さらには「徳」概念の不十分さにも反映しているのである。

#### IV. 『パリソ宛ての書簡詩』

IV. 1. この書簡詩の成立事情など——宛名人である G. パリソ (Gabriel Parisot 1680-1762) については『告白録』の7巻の始めの部分で《le bon Parisot》として優しく語られている。人体内の結石に関していくつかの論文を書いている医者である。この書簡詩はアレキサンドリア句格で書かれており、『野人のミューズ、あるいは小人の著作』(La Muse albroge ou les oeuvres du petil Poucet) と題する詩集の自筆草稿ノート(1742年)中に見出される。活字化されてデュフル編「書簡集」第I巻及びプレイヤード版「全集」第II巻に収録されている。Ch. ギョーの研究によれば、この書簡詩はおそらくある部分はシャルメットで、他の部分はリヨンで1741~1742年の間にできたとされる。草稿の中の日付では1742年7月10日完成と記されている。

IV. 2. パリソ宛て書簡詩の構造と内容——原文は316行から成り立ち、それが『書簡集』では16節、プレイヤード版『全集』では15節に区分されている。しかし私はすでに『ボルド宛て書簡詩』の分析にさいして試みたように私自身の観点から別の区分で内容の構造を明らかにしてみたい。そうすると全体は内容に応じて11の節に分たれるのである。

第i節：パリソへの拶挨と訴え。 (1~26行)「友よ、君の目を今悲しませるのを承知で、私は困難と倦怠に満ちた心情を露わにする」この冒頭の詩句は率直にこの時のルソーの危機的状況を予告している。そして「優しい友よ、父親のようなただ一人の人よ」と呼び掛けて、自分の心境を理解し同情することを求めるのである。

第ii節：これまでの育ちと自由な精神への教えへの懷疑と絶望。 (27~39行) 運命の気まぐれで様々の悲しい経験をしたと述べたあとで、30才の

続： J.-J. ルソーの無名時代の著作研究

ルソーはうめくようにいう。「運命は私を自由に生まれさせた。あゝ、それが何の役に立とう？ 運命は私にこんなに虚しくしかも高価なものを売ったのだ。私は実際自由だ。しかしこの残酷な善から私は現実の不幸よりむしろ倦怠を受け取った。」ルソーはさらに「卑劣に貴族の前で這う」ように教えられていたらまじだつたとさえ述べて、本来は誇りにすべき自由、平等、真実への精神、共和主義的精神をいたましくも重荷と表明している。

第 iii 節：ルソーを形成した教えの内容。 (40～98行) ルソーはここで今や上述のように疑われ重荷となっている幼児期からの教えの内容をなつかしさと悲しみを込めて回想する。それは「卑劣にならずに義務を果し——人間味 (humains) を養って法に従う」ということであった。そして「最高の権力に与る権利」即ち「いかに小さく弱く愚かな市民であっても、私は主権のメンバーであった」事もその教えの重大な内容であった。人々はさらに「技芸 (art) が生み出した広汎な権力は／奢侈によって直ちに崩壊する」ことを教え、「正しいという事が私たちの下では唯一の政治」であること、首長、行政官が際立っているのは「ただ彼らの徳によってであること」を語ったのだった。

第 iv 節：これらの教えと現実の衝突。 (79～110行) これらの教えで「磨かれた」ルソーの「理性」から見ればルイ王朝下の貴族、行政官らは虚飾によって地位の高い愚人共にすぎない。しかもルソーの経済的現実はその人々に救いを求めざるをえない程追いこまれているのだ。こうなってみると若いルソーは感ぜざるをえない。「すべての美しい感情は／私の運命を柔らげるどころか、私の苦痛をかり立てた／疑いなくすべての人の目に貧窮 (misère) は恐ろしい／しかし考えることを知る者には貧窮ははるかに強く感ぜられる」と。(93～96行)

第 v 節：ヴァラン夫人との出会い以後の心境の変化。 (111～163行) こうして現実への怒りと不平にやり切れない思いの若いルソーの上にヴァラン夫人の強い影響力が作用する。それまで嘆きながらも自分の受けた教え

を信じそれと違ひ現実へと怒っていた姿勢は、現実を肯定し自己の信念を否定する姿勢へと変容していく。これはルソーの退歩なのか成長なのか。これは既に『ボルド宛て書簡詩』第iv節の研究で問題とした事であるがいずれにしても次節と共に興味深い内容を示している。ヴァラン夫人への熱い感激を述べた(111~130行)あとで「そのこっけいな強情が喜劇的に少年時代を小説的な趣き (Romanesque) にまきこんだ傲慢な未熟児 (orgueilleux avorton)」と自己を呼ぶルソーは「私の保護者により誤まりを学びつゝ／私は私の道徳 (moeurs) を訂正するの必要を感じた」と告白する。そして次の驚くべき句が出現する。「社会においてよくないだろう／階層 (rang) の間に不平等がより少ないとしたならば。」(145~146行)そしてこれがルソーによれば「こういう風にこれ程長い間無気力だった私の理性から／この時以来私は誕生中の理性 (une raison naissante) を形成した」という事なのである。私たちがこれらの詩句を読み呆然とし、そこに青年ルソーの譲歩、退却さらには変節を見るのは容易である。しかし、単にそういう視点でのみ見ることはルソーの成長をあまりに否定的にのみ見ることなのではないか。私としては続く句「私は人間性を愛した：私は優しさを養った」の中にルソーの生への理解の広まりを真実のものとして積極的に評価したいと思う。

第vi節：リヨンでの体験(都市生活の讚美とストイックな信念の自己批判)。(163~198行)『ボルド宛て書簡詩』において産業都市リヨンの讚歌が登場して「非ルソー的あるいは反ルソー的なもの」を感じさせたのであるが、この『パリソ宛て書簡詩』にも同様な響きがこの節には聞えてくる。ただ今度の場合には、何を青年ルソーがリヨンでの生活から学び取ったのか、そして、なぜ私はそれを生の理解へのひろまりとして把握するのか、などがより明らかにされうる。ルソーははっきりと次のように述べている。「最後に、君の祖国〔リヨン〕での2年間に／私は生の甘美さを耕すことを学んだ」(163~4行)。かつては「ストイックな悲しい峻厳さ」がルソ

続： J.-J. ルソーの無名時代の著作研究

ーの考えに浸透していた。これまでルソーはエピクテトスとゼノンの倨傲 (fierté) を讃え、「ただ徳だけが私たちを幸福にしうる」という主張に感動してきた。だが今やルソーは言明する。「長い間この誤まった輝かしい空想が／私の精神を欺き、私の性格を損なった。」と。(171～2行) なぜ誤まった空想というのか。それはストア派の理想は「神のみにしか許されない。」幸福であるからである。『人間にとって――情熱が奪われればもはや幸福はない』(174～5) 事を今やルソーは学んだのである。ストア派への全面的帰依からのこの解放は、ルソーのその後の思想的展開にとり重要であり、必要な転機であったと私は考える。一面的な厳格主義、ストイックな姿勢の超克なしには少なくとも『新エロイーズ』や『エミール』の存在は考えられない。またプランだけに終わった『感覚的道德または賢者の唯物主義』の構想も生じえなかったであろう。

リヨンの生活の中でも、この転回を生じさせる最強の力は「親しいパリソよ、君との愛情ある交わり」だった。ルソーはいう「その時私はどれ程魅力的か知ったのだ／知恵にいくらかの楽しみ (amusement) を加えることが。何人かの礼儀正しい友、蠻性の少ない (moins sauvage) 風土、いくつかの無邪気な快楽が私にその使用を教えた」(181～4行) と。このような気心の知れた少人数グループの交わりの歓び、それは『新エロイーズ』中のヴォルマールの農園生活で生々と描かれている生の歓びと呼応している。若いルソーを引きつけたものは「よいコトバ、優雅な詩、生々した会話、愛想よい会食者達により陽気にされる食事」であり「交わりの小さな歓び」であった(191～3行)。

たしかに「豪華な生活の魅力」が青年ルソーの目に「すべての部分から輝い」たことも無視はできないであろうが、大産業都市の生活の中でもルソーを考えさせ、深めたものはやはり上述の詩句に示されるものであった事を見逃してはならないと思うのである。

第 vii 節：中庸の強調 (199～210行)。節度ある (少人数グループの) 生

活の幸福は強調される。「放蕩と過度は恐怖の的。罪深い快樂は魂の苦惱」である。「徳でさえも過度であってはならないとい」う句はやはりストア派やジャンセニストに向けられたものであろう。

第 viii 節：再度の嘆息と後悔。 (211～230行) ここでは再び現実の社会で巧くやっていけない自分への嘆息が痛々しく呟かれる。

第 ix 節：「現在成功している人達への批判。」 (231～256行) 「この世界で輝くには〔真のものとは別の〕他の才能が必要だ」ということをルソーは痛切にうったえる。「あゝ、何を私は為せるのか、臆病で／大胆厚顔のふりができず自分に満足するふりも倨傲で美事な調子もできない――この私が？」若いルソーの目には成功は偽りとへつらいによってのみ達成されている。それは芸術家でも宗教家でもそうである。だが「真に思慮ある人は／彼の嘘を信ずるうぬぼれ屋や愚者に嘘をつくのを恥じる」のである。

第 x 節：自尊の表現とヴァラン夫人との別れについて (257～284行)。続いてルソーは叫ぶ「否、真摯の生まれつきの私の精神を／このように本来の性質をごまかすように強制はできない。私の心情にとりそれは余りに無理なことだ。」しかし、そうすればヴァラン夫人の経済的困窮は救えない。ルソーは無益と知りつつ、純粹の熱意、心情を毎日捧げることが誓う。「憂うつをわかつ事は憂うつを癒すことではない。」ヴァラン夫人の苦惱を見るのはあまりにいたましく、若いルソーには堪えられないのである。

第 xi 節：結び〔今後への決心〕 (285～316行)。以上が「私の不幸の素朴な画だ」とルソーはいう。そして「結局、人々が何を考えるかはどうでもよい。――人々に賞められることのできぬ者は／至福を憧れることができないのか？」と問い、「心情の快樂が賢者の幸福をつくる。」と答え、「平和な境遇でその甘美さを味わうのが／私の感じる最も親しい願いだ。一冊のよき書、一人の友、自由、平和／幸福に生きるためにこの他のものが必要だろうか？」と続けられる。私たちはこれらの詩句を世間的成功に失敗した野心家の諦めと口惜しまぎれの言とも解釈できよう。しかし私は

これらの詩句はもっとルソーという人間存在の本質に発するものであり、『エミール』『告白録』『夢想』のもっとも魅力的な部分と調べを共にするものと考えたいのである。

## V. 総 括

ここで既に各所で述べたことをもう一度短かい言明に圧縮して、リヨン時代のルソーの精神発展上の注目すべき点を浮彫りにしてみよう。

1. この時代までルソーの中ではストイシズム、カルヴァンの厳格主義、そして共和主義（自由と平等）の精神とが分離されずに混合一体となっていた。

2. シャンベリー時代にストイシズムとカルヴィニズムの区別は行われたが、リヨン時代ではさらにこの両者と共和主義精神との区別が行われ出したことが明らかであり、これはルソーの思想的発展にとり極めて重要である。

3. ストイシズム、カルヴァンの厳格主義の超克は一方は貧困への批判を経て社会体制の改造へ、他方では生の肯定、自然な快樂の肯定へと発展した。

4. ただしリヨン時代のルソーには奢侈の肯定、産業の讚美という逸脱が見られる。

以上はこの論文での範囲内でまとめた事であるが、さらに前論文『ルソーの無名時代の著作研究』（哲学〔三田哲学会〕第56集）で扱ったものまで含めて、青年ルソーの著作によりうかがえることを総括すると次の如くなるであろう。

1. 青年ルソーの思惟形態及内容にはまだ未定形の要因が多い。

2. シャンベリー・シャルメットからリヨンへの移行は、ルソーにとり大きなひとつの転機であり危機であった。シャンベリー・シャルメット時代の著作とリヨン時代の著作の間には素朴な肯定と懷疑、楽観と絶望・怒

りという大きな差が顕著である。

3. 書簡詩に示されているリヨン時代の暗い懐疑と絶望は『告白録』の呑気な明るい位の回想とは対照的であり、書簡詩の方が真実の姿を示していると思われる。

4. 同じリヨン時代の著作でも『プロジェ』はその目的にもよるが確信と理性的調子をもっており、シャルメット時代の明るさが続いているとも見られる。

5. しかし感情の起伏、思想的、感覚的めまいにもかかわらず、青年ルソーは彼の基本的路線を確立しつつあることもまた明らかである。

付記： 私は『哲学』第56集掲載の前論文の註 (p. 127) で、デュフル編のルソー書簡集I巻とプレイアード版のルソー全集IV巻 (第VI巻とあるはミスプリント) には異なった『メモワール』が収録してあると記した。しかしその後時間を得て検討した結果、デュフル編書簡集の『メモワール』はまさに『断片』であり、プレイアード版の『メモワール』(結局は『Mme Dupin の Le Portefeuille』中に見出されたもの) の中央部分約1/3の拙萃であることを確認した。したがって興味を引く問題として『メモワール』と『プロジェ』の異同点とその意味があるが、ここでは詳論できない。

## VI 文 献

1) *Épître à M. Bordes* については Th. Dufour 編の『ルソー書簡集』*Correspondance générale de J.-J. Rousseau* の第I巻、及び、*Œuvres complètes de J.-J. Rousseau* (Bibliothèque de la Pléiade) の第II巻を原典とした。なお前者は C.G, 後者は O.C という略号で表わしている。

2) *Lettre à M. Conzie* については本文の通りである。

3) *Épître à M. Parisot* については *Épître à M. Bordes* と同じである。

4) A. ポウプの『人間論』については上田勤訳 (岩波文庫版) を参照した。

## The Study on Writings of J.-J. Rousseau in His Nameless Period

—Continuation—

*Akira Inoue*

### Résumé

Chap. I Preface

Chap. II Letter in Verse to Bordes

Chap. III Letter to de Conzié

Chap. IV Letter in Verse to Parisot

Chap. V Conclusions

Chap. VI Bibliography

As the continuation of the former paper on Rousseau, (Philosophy, ed. by Mita Philosophical Society, No. 56, 1970) I try to study here two letters in verse and a letter by J.-J. Rousseau written between 1740~1742, namely in his days in Lyon.

In his Letter in Verse to Ch. Bordes, his friend then, his adversary later, Rousseau discusses the theme of poverty and wealth, and has no sympathy with the stoic notion that there are advantages in poverty and that the poor ought to be happy. Young Rousseau suggests that there is no wisdom where poverty rules. “Tant de pompeux discours sur l'heureuse indigence m'ont bien l'air d'être nés du sein de l'abondance.”

In his Letter to F. J. Conzié, his friend in Chambery, Rousseau criticizes “An Essay on Man” by A. Pope, the representative English poet in the 18th Century. Rousseau attacks Pope's key concept that there is the chain of beings between Creator and creatures. Rousseau shows, however, his approval to Pope's words on human happiness that no man can not make happy life without virtue, but at the same time, no man can not make happy life with virtue

alone. Rousseau regards virtue, health and the necessities of life as three components of human happiness, but in this period he has no exact and deep sense of the necessities of life.

In his Letter in Verse to G. Parisot, a surgeon, young Rousseau confesses the continued anxiety caused by the world with which he would have to come to terms. He can not forget the ideal of a state which is made up of equal citizens, all sharing in the exercise of sovereign power. But before his eyes the very different pleasures of taste and all attractions of an opulent life in the big industrial city are paraded. He begins to reject the stoicism and semi-jansenistic rigidities of his moral view and his Genevan upbringing. “Long-temps de cette erreur la brillante chimère, séduisit mon esprit, roidit mon caractère” But in spite of the doubts and giddiness besetting him, he continues to form his own thought concerning real happiness, good society and good education.